

Nara Women's University

平成18年度新設授業科目:研究マネジメント群:キャリア形成群:実施記録報告書[授業担当者による授業記録・改善策:II
キャリア形成群:博士前期課程:大学教員実習]

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 「魅力ある大学院教育イニシアティブ」 奈良女子大学大学院人間文化研究科 教育プログラム推進委員会 公開日: 2010-02-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐久間, 春夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1461

平成 18 年度 **新設授業科目**
研究マネジメント群・キャリア形成群
実施記録報告書

大学教員教職実習

キャリア形成群（博士後期課程）

大学教員教職実習 授業報告書

担当 佐久間春夫

4月24(月)第1回オリエンテーション

履修登録者(6名)に対し本実習の目的並びに実施形態について説明を行った。登録学生は社会人学生が多く、予めシラバスで説明済みにもかかわらず、I期、II期の各1週間にわたる附属中等教育学校でのAGには出席できないとのことで、2名の履修が確定した。実習予定は、附属側との協議に基づき、I期では「スポーツ科学の過去・現在・未来」に授業観察として参加し、II期で各自の専門領域に基づく講義を行うこととした。

<参考資料>

■講座名 スポーツ科学の過去・現在・未来
■講座コード 5
■講師 佐久間春夫、木梨雅子、井上洋一、甲斐健人、鈴木康史、藤原素子、成瀬九美、
星野聡子(文学部スポーツ科学講座)

■開講時期 I期・II期

■目的

各種競技スポーツをはじめ、ウォーキングなどのいわゆる健康スポーツも含め、今日ではスポーツは生活の中で欠かすことのできないものになっています。人間の知恵は、宗教的あるいは医療的な”運動”を生みだし、さらにやや性質を変えつつ、スポーツを作り上げてきました。即ち、実用性からだけではなく、時には感情や偶然の行動から生じ、変容してきました。そのような変化はなぜ生じてきたのでしょうか。また、今後どのように変わっていくのでしょうか。今回は、複合科学として様々な背景をもつスポーツ科学の立場から運動を行う人間に焦点をあてて、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

■内容等

I期(9月3~7日)	II期(12月13~17日)
第1日 日程説明	木梨・甲斐
第2日 木梨	井上・鈴木
第3日 井上・鈴木	佐久間・成瀬
第4日 佐久間・成瀬	藤原・星野
第5日 藤原・星野	大学院生による講義

○講義時間

1限目 8時45分~10時15分 2限目 10時30分~12時

○受講学生

I期目 24名 II期 18名

○直前オリエンテーション

8月31日 I期の受講生の確認と準備すべき資料の整理と「レポート課題」の説明

12月4日 II期の受講生の確認と担当予定の講義概要の説明

○木梨雅子 (スポーツ史) 「スポーツ科学—この多様な未知の地」

スポーツ科学はこれまでの学問分野の枠を越えて飛躍的な発展を遂げつつあります。哲学、歴史、医学、心理学、栄養学などあらゆる分野の知見がスポーツ事象の解明のために動員されてきました。その背景には、それぞれの時代の強い要請がありました。歴史家の立場から、いくつかのキーワードをもとに、それらに象徴される時代を振り返ってみることにします。

○井上洋一 (スポーツ法学) 「スポーツをめぐる法律問題」

スポーツが文化として世の中に広く認識され、一方で巨大なビジネスとして成長してきた今、現代スポーツをめぐる諸問題は、多くの法律的な関わりを持つようになってきました。ここでは、スポーツへの参加の機会からプロ・スポーツの紛争まで広く法律的課題について考えてみましょう。

○甲斐健人 (体育社会学) 「暮らしの中での身体、健康」

「健康日本21」という言葉を知っていますか。自尊心を失わず人生をまっとうしたいという願いはこの社会で暮らす多くの人を突き動かしているようです。ここでは地域に根ざした健康づくり運動をとりあげ、人の暮らしや健康、現代社会のあり方について考えたいと思います。

○鈴木康史 (スポーツ哲学) 「グローバリゼーションとスポーツ」

グローバリゼーション、という言葉も、誰もが一度は耳にしたことがあると思います。政治・経済・文化が国境を越えて交流し均質化してゆくなかで、スポーツは最もグローバルたり得るビジネスとして巨大化の一途を辿っています。ともすれば日本選手が勝ったか負けたかばかりに興味が行ってしまうオリンピックやワールドカップをこうした視点から眺め、21世紀のスポーツと世界の関わりについて考えます。

○ 院生講義

* 「バイオメカニクスからみた“動くからだ”の不思議」

スポーツに限らず、“からだ”が“うごく”とはどういうメカニズムがあるのか？上手いと思う瞬間には何をとらえているか？機能解剖学的背景から、身近な例を取り上げ、特に運動部での日常の練習あるいは試合場面での巧みなスキルの遂行について実習を取り入れながら行う。

* 「達成動機とストレスコーピング」

私の専門領域である教育心理学・認知心理学についてわかりやすく説明し、日常場面で応用できそうなストレスコーピングをテーマとした講義・演習プログラムを検討する。人とうち解けるには、あるいは友人関係での悩みを解決するにはなどについての簡単なコピー

ング法についてストレッチをはじめとした筋肉のゆるめ方や、腹式呼吸など、身体コーピングの演習を2名一組で実習を行う。

<実習後>

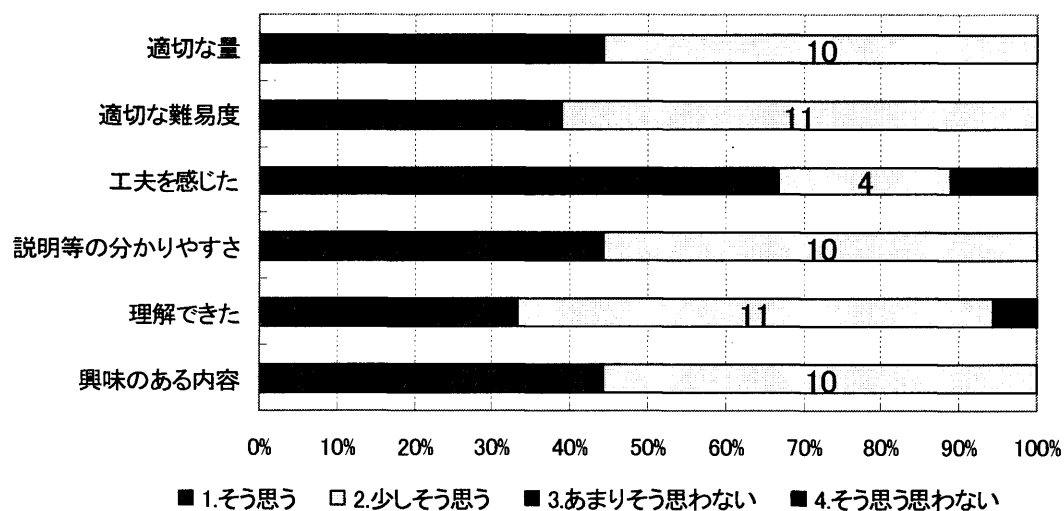
○.実習生からの感想

- ・前期AG終了時点から、生徒は「聴く」姿勢はできていると感じた。また、テーマを生徒が自主選択し、少人数編成で実施できたことは、かなり大学の授業に近い形式といえる。
 - ・本時における生徒の講義参加姿勢や態度は、前半の理論講義形式では礼儀正しく「聴く」スタイルであった。ただし、身体的な疲労(たとえば睡眠欲求)や、テーマに対する興味、関心が低いと見受けられる生徒も若干名あり、邪魔はしないがほとんど無反応という生徒も数名いた
 - ・今回の体験は非常に衝撃的であり、学びの多様性と可能性を考える上でのよい刺激になった。また専攻が異なる院生・学生との関わりの重要性、研究者にとって大切な観点を再認識できた。
 - ・私自身が講義を担当する以前に受講した他の先生方などの講義も、スポーツ科学の素人として非常に新鮮な思いで聴き、知的な刺激を受けた。今回AGで講義を担当することによって、大学の教員として必要な資質・能力についても、改めて考えるきっかけになった。
- D課程では主専攻が異なる院生・学生との関わりが希薄になりがちだが、授業方略以上に、大学の研究者にとって知的な好機動機は必要十分条件であり、いかに大切であるかを学んだ。
- ・「なぜ？」の部分を明確に提示することで大学の学問であっても難しいだけにはならないのではないかと感じた。問題を提起して予想をさせたり、逆に何が問題なのかを生徒から引き出してみたりという場面では、想像していなかった答えが返ってくるという反応もみられた。なるべく生徒の声を聞くような機会があれば一方的な授業ではなくなるし、そのやり取りが授業の中では何度か必要である。

<附属の生徒からの評価について>

下図に示すように大変に好評であった。生徒の自由記述を紹介する。「私はテニスをやっているけれど、どうやってボールを打っているかなどあまり考えずに、夢中にテニスをやっていました。けれど、人の体が動くということはすごい事だと思いました!!瞬時に目で見、頭で考え行動に移せる能力はすばらしいと感じました。この分野はとても興味深いです。」「ストレスはすべて悪いものではないことが分かった。しかし、自分なりのストレスコーピングを見つけて、うまく自分をコントロールすることは大切だと思った。」「ストレスの対処法などがわかり、普段の生活にも生かしていこうと思いました。」

このように、実習生の意気込みが十分に生徒にも伝わったように思える。

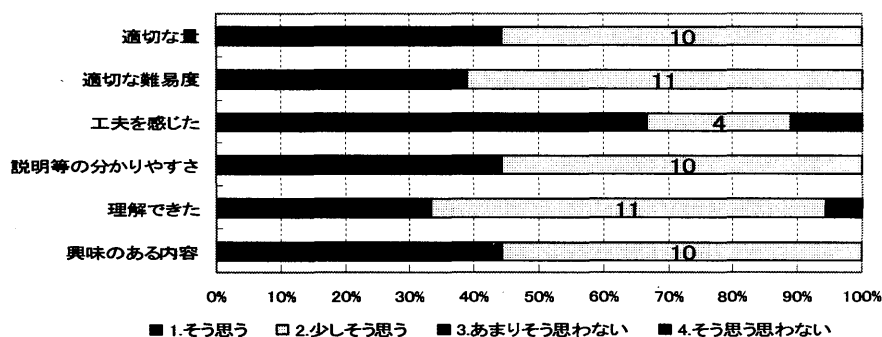


<実施上の問題点>

- ・今回、本実習の履修者の確定が決まらず、当初附属側と検討していた、院生独自の AG 科目の設定が困難となり、急遽、Ⅱ期でスポーツ科学の開講科目に参加してもらうこととなった。社会人学生の多い実態から、実習形態を考える必要がある。

① カリキュラムの改善点、

初年度ということもあり、大学側と附属側との教務上の調整に時間的なズレが生じ、また、履修学生の変更等があり、アカデミック・ガイダンスとしては必ずしも附属側の要望に応えられるカリキュラム内容でなかったが、受講生の評価は高かった（下図参照）。



なお、今年度の履修学生2名の講義題目は、「達成動機とストレスコーピング」、「バイオメカニクスからみた“動くからだ“の不思議」であった。

② シラバスの改善点

シラバスが、後期課程の学生用と附属の生徒用との2種類の作成が必要となるが、前者については、現状のままで良いと思われる。後者については、履修学生数とその専門（狭義の）が確定してから作成する為に、附属側のオリエンテーションに十分な説明ができず、真に関心のある生徒を集めにくい。前述と重複するが、履修登録日を早める必要がある。

③ 授業形態の改善点

アカデミック・ガイダンスでは、90分の講義形態をとるため、可能な限り生徒とのコミュニケーションを計り、実習的（供覧実験的なものも含む）な要素を取り入れることについてオリエンテーションで説明を行った。「なぜ？」の部分で明確に提示することで大学の学問であっても難しいだけにはならないのではないかと感じた。問題を提起して予想をさせたり、逆に何が問題なのかを生徒から引き出してみたりという場面では、想像していなかった答えが返ってくるという反応もみられた。

④ 配布資料の改善点

パワーポイント用の配付資料をもとに講義が進められたが、理解できたかのチェック項目の入ったようなプログラム学習的な資料がより効果的と思われる。

⑤ 履修学生からの感想・反省

今回の体験は非常に衝撃的であり、学びの多様性と可能性を考える上でのよい刺激になった。とかく専攻が異なる院生との関わりが希薄になりがちだが、本実習の中で、関わり的重要性が研究者にとって大切な観点であることを認識でき、授業方略以上に、大学の研究者を目指すものにとって、知的好機動機が必要十分条件であり、いかに大切であるかを学ぶ機会となった